

日本語の副詞シバシバ・タビタビとタマニ・マレニ

八尾 由子*

1 はじめに

本稿は、表題にあげた四つの副詞について、事態の時間的限定性・話し手による事態のとらえ方という二つの点からそれぞれの特徴を記述し、タビタビとタマニ、シバシバとマレニに共通性があることを指摘するものである。

まず、先行研究における考察の結果と、問題と思われる点を以下に示す。

矢澤(1987)は、ひとまとまりの動きや事態などを単位とした連用修飾成分を対象とし、それらを分類してそれぞれのタイプの構文上のふるまいについて考察している。その分類の一つとして「反復の連用修飾成分」を設けている。そしてその下位分類の一つに「頻度の連用修飾成分」を設け、具体例として「いつも」「時々」「しばしば」をあげている。さらにこの「頻度の連用修飾成分」の被修飾単位は「動き」ではなく、モノ・コトの存在や一時的な状態をも含めた「事態」であり、その事態が時間軸上においてどのくらい存在するかを修飾限定する、と述べている。

この指摘はここにあげた三つの副詞に限れば適切であろうが、頻度の頻度を表す副詞のうち、「事態」を修飾するとは言い切れないものもある。¹また、「動き」の頻度と動きのない事態の頻度のうちどちらを主に表すかが個々の副詞によって傾向が異なることには触れられていない。

森田(1989)は頻度を表す個々の副詞の用いられ方や意味について詳しく記述し、トキドキ、タビタビ、シバシバをヨクと比較するなど類義語間の相違にも触れている。しかしタビタビとシバシバとの相違点については前者を口頭語、後者を文章語と、文体上の相違にしか言及していない。

田他(1998)では、「『時々』は動作性の経験・習慣となっていない事柄に使われ」、「『よく』は状態性の習慣・そうなりやすい傾向を表している」と述べた上で、タビタビとシバシバの違いについて、「『たびたび』は『時々』の動作性の回数を増やした日常語で、『しばしば』は『よく』の状態性の習慣・傾向の間隔を狭めた文章語」と述べている。しかし、トキドキには(1)(2)のような例も見られ、動作性と言い切ることは問題があるろう。

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科社会文化学専攻

1 仁田(2002)でも指摘されているが、シキリニには、事態の反復か事態を構成する動作の反復かの判断が難しい場合があり、様態の副詞に近づいていると考えられる。例えば「誰かがたびたびドアを叩いた」はドアを叩いた後しばらく時間をおいてまた叩く、というように断続的に事態が繰り返される様子を表すが、「誰かがしきりにドアを叩いた」はインターバルをおかないで連続してドアを叩くという一つの事態である可能性もある。

(1) 何組のなにがしというヤクザでもない青白いインテリに、時々こういう教祖めいたヤサ男がいるものであるが、悪事の型がきまっているヤクザとちがって、こういう奴らは何をしているか分らない。(坂口安吾『街はふるさと』)

(2) 酒も亦牧野さんの人生の一設計で、彼は「飲み助でなければならなかつた」けれども、飲み仲間では誰よりも酒に弱く、酒が時々きらひですらあつた。(坂口安吾『牧野さんの死』)

また、「『しばしば』は『よく』の間隔を狭めた表現」とは、すなわちシバシバはヨクより高頻度だということであろうが、この両者のどちらがより高い頻度を表すか、判断は難しいと思われる。

飛田・浅田(1996)では、「『しばしば』は全体的な傾向として頻度が高いことを表すニュアンスがあり、個々の行動には視点がおかれていない点で『たびたび』と異なる」と述べている。また、タマニとマレニについては「『たま』は『まれ』に似ているが、『まれ』は同類のものが非常に少ないことをやや客観的に表し、頻度だけでなく具体物についても用いられる。また、頻度について用いられた場合には、『たま』よりもさらに頻度が低くなり、繰り返し起こる可能性は考えられていない。」と指摘している。シバシバとタビタビとの相違点に関しては本稿の主張と重なるところがある。だが、マレニでは繰り返し起こる可能性は考えられていないという記述は、頻度について用いるということと矛盾するのではないだろうか。

仁田(2002)は、頻度の副詞を、主に頻度の高低を基準に四分類している。頻度の副詞を用いた文がル形で繰り返し事象を表すことから、事態が顕在的なものから潜在的なものとなり「習慣」「特性」を表す場合もあること、また、シキリニが多回性を表し様態の副詞への傾きを見せていることの指摘など詳しい考察がなされている。さらに「頻度の副詞の、状態性事態への出現は、頻度の副詞によって、出現のしやすさが異なっている」ことにも触れている。

しかし、頻度の高低による分類の基準がややあいまいであり、タビタビとトキドキとをいずれも中頻度に分類している点は母語話者の感覚と必ずしも一致しないところがある。また事態の潜在化の度合いが各々の副詞によって異なることに言及していない点などが不十分である。

以上、先行研究の成果と問題点を挙げた。概観すると、頻度を表す表現を分類する基準としては「文体の違い」「頻度の高低」「頻度の単位 動きの頻度か、動きのない事態をも含めた頻度か」「全体的傾向か個々の傾向か」の四つがあったと言える。本稿で取りあげる「事態の時間的限定性」は、このうち、「頻度の単位」「全体的傾向か個々の傾向か」と重なるところがある。本稿で用いる「話し手による事態のとらえ方」という基準は、これまでの研究では指摘されていないようである。以下、以上の先行研究を踏まえて、主に実例をもとにして考察を進める。

2 事態の時間的限定性の有無

工藤(2002)によれば、時間的限定性とは、ある事態が個別具体的な時間に縛られた一時的現象であるか、それとも個別具体的な時間に縛られていない恒常的な本質かの違いをとらえるカテゴリーである。現象のうち、動的展開を持つものを 運動、持たないものを 状態 と呼んでいる。運動 は主に動詞述語で表される。

例：太郎が椅子を作る 運動 足が痛む/痛い/筋肉痛だ 状態

注意が必要な点は、ここでいう 状態 とは、存在を表す動詞や形容詞、名詞を用いて表す、いわゆる状態性の述語とは同じものではないということである。状態 は恒常的な事態ではなく、あくまで一時的な現象の一種である。

さて、一時的現象と恒常的本質との中間にあるのが 存在 である。(存在 は、現象を表すことも、本質を表すこともある。

例：先生は教室にいる 一時的現象 鎌倉山はまむしがいる 恒常的本質
時間的限定性を持たない事態としては 特性 関係 質 がある。質 は諸特性の複合体で、主に名詞述語で表される。

例：花子はしっかりしている/堅実だ/しっかり者だ 特性

趣味が一致する/同じだ/共通だ 関係

花子は日本人だ 質

工藤(2002)では、これらの間には相互の移行があることも述べている。運動は一回的運動から 多回的運動 反復的運動 習慣的運動 を経て時間的限定性が失われ、恒常的特性に移行しうる。多回的運動 とは、同一の時空間、反復的運動 は異なる時空間における不規則な繰り返しであり、(習慣的運動)は異なる時空間における規則的繰り返しである。

例：彼は今朝、咳をした。一回的運動

彼は今朝、立て続けに咳をした。多回的運動

彼は今朝入社してから退勤するまでの間、何度か咳をした。反復的運動

彼は外の冷たい空気に触れるたびに咳をした。習慣的運動

上の例は個別主体であるが、主体が一般主体であれば 特性 を表し、また動詞ル形を用いた場合には個別主体でも 特性 になりうる。工藤(2002)では、個別主体が動詞ル形をとって特性を表す例として「彼は酒を飲む=酒飲みだ」をあげ、一般主体の場合に特性を表す例としては「子供はよく泣く=泣き虫だ」をあげている。

以上が時間的限定性という概念の概要であるが、本稿の対象である頻度を表す副詞と照らし合わせてみると、頻度を表す副詞を用いて表された事態は、主に 反復的運動 を表すと考えられる。ただし、述語が動詞ル形をとった場合、あるいは個別主体ではなく一般主体をとった場合に

は、具体的に特定された時点に生じた個別の事態を表さず、時間的限定性が失われて 特性を表すことになる。次の章では、反復的運動 から 特性 への移行がどの程度進んでいるか、各々の副詞によって傾向が異なることを見ていきたい。

3 反復的運動から特性へ

3.1 シバシバとタビタビ

シバシバとタビタビとは、前者が話し言葉になじまず後者には文体の制限は見られないという違いがあるが、(3)(4)のように、交換可能で、頻度の高低も大差がないように思われる例がある。

(3) その間、絵はもちろんのこと、家事も抛ったらかしてしたから、智広はほとんど柳生家に預かってもらっていました。わたしが食事に戻るのも柳生家で、しばしば(タビタビ)智広と一緒に泊めて貰ったりもしました。(筒井康隆『エディプスの恋人』)

(4) 女の顔に見覚えがあった。どこかで見た顔だった。どこかで見た、というだけでなく、たびたび(シバシバ)見ている顔だった。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

(3)(4)はいずれも個別主体による 反復的運動 を表す文である。

ところが、交換によって意味が異なってくる場合もある。

(5) 胃のサボタージュのひどい時にはしばしば(タビタビ)脳貧血を起すものだ、脳貧血はところ嫌わず起るものだから厄介だ、・・・(略)。(小出楯重『楯重雑筆』)

(5) は一般論を述べる「～ものだ」構文であるが、ここできりに「ものだ」を除いて考えてみたい。

(5') 胃のサボタージュのひどい時にはしばしば(タビタビ)脳貧血を起す。

具体的な主体は明記されていない。不定主体である。シバシバを用いた場合、次の二通りの解釈が可能である。

(ある人は)胃のサボタージュがひどい時、何度も脳貧血を起こす。

一般的に胃のサボタージュがひどい時には脳貧血を起こすケースが多い

ところが、これをタビタビに換えると、一般論でなく、胃のサボタージュを起こした特定の人について述べる文になる。いずれも 反復的運動 であるが、タビタビが同一主体の身の上に繰り返し起こる事態であるのに対して、シバシバは胃のサボタージュがひどくなった複数の主体A、B、C・・・にそれぞれ脳貧血が起こる、という事例の多寡を表しうるのである。では、次の(5'')ではどうであろうか。

(5'') 胃のサボタージュのひどい時にはしばしば(タビタビ)脳貧血を起こした。

この場合はシバシバを用いても一般的なケースの多寡ではなく、ある同一主体における事実を述べる文になる。

次に交換不可能な例をあげる。(6)(7)(8)は、シバシバからタビタビへの交換が不可能な例である。

(6) ああいう階層の、あのくらいの年ごろの女性に……彼女たちは、一方人生で何もしていないこと、他方人生を十分に生きたい欲望の結果、しばしば(*タビタビ)意地わるで感じが悪かった。(サガン『悲しみよ、こんにちは』)

(7) 我々に武器を執らしめるものはいつも敵に対する恐怖である。しかも屡(*タビタビ) 実在しない架空の敵に対する恐怖である。(芥川龍之介『侏儒の言葉』)

(8) 昆虫採集家がしばしば(*タビタビ)旺盛な所有欲の持主であったり、極端に排他的であったり、盗癖の所有者であったり、男色家であったりするのも、決して偶然ではないのである。(安部公房『砂の女』)

(6)(7)(8)に共通するのは、まず個別主体ではなく、共通の特徴を持つグループあるいは一般主体であること、そして述語が動きを持たない事態であること、この二点である。これらの例において、シバシバで表されるものは主体による繰り返しの頻度ではない。話し手が主体に遭遇した場合、それが述語で表される特徴を持っていることがシバシバだ、と言っているのである。

逆に、タビタビからシバシバへの交換ができない例もある。

(9) 事実たびたび(*シバシバ)叩頭する老婆のほつれ毛は足の裏に触れ、くすぐったさはますます可笑しさをあおったのである。(三島由紀夫『金閣寺』)

(10) 僕は低い声で笑ったが、少年は笑わなかった。振りむくと、少年は唇を固く噛みしめていた。僕はぐったりして寝椅子の背に頭を倒し、小さい音をたてた。学生と少年たちはたびたび(*シバシバ)笑った。そしてその笑いは、いつものくすぐったい卑猥な笑いとは微妙に異なっているのだ。(大江健三郎『死者の奢り・飼育』「他人の足」)

(9)は一人の老婆が主人公の足元で叩頭を繰り返す様子を描写しており、(10)は話し手と同じ部屋にいる「学生と少年たち」がその場所で複数回笑ったことを述べている。いずれも、個別主体が具体的な同一の空間において動作を繰り返すことを表している。このような場合にシバシバは不適當である。

ここまでの観察から、シバシバとタビタビとはいずれも 反復的運動 を表しうるという共通点を持ちながら、次のような違いがあると考えられる。

シバシバは、線的な時間軸上の分布だけでなく、空間的な広がりの中で、話し手が当該事態に遭遇した頻度を表す。したがって、動きのない事態について用いることもできる。時間的限定性のない、一般的なケースや恒常的な 特性 にも用法が広がっている。一方、タビタビは線的な

時間の流れの中で、繰り返される動的な事態、つまり 反復的運動 を表す傾向が強い。一般主体や動きのない事態には用いることは難しい。

3.2 マレニとタマニ

マレニとタマニとの間には、シバシバとタビタビとの間に見られたのと似た相違点が見られる。まず、交換可能な例をあげる。

(11) 彼は教官会議の席では稀に (タマニ) しか口を開かなかったが、自分の利害に直接関わるような件がもち上がると必ず発言を求めた。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

(12) 信夫はたまに (マレニ) くらがりの中でうしろをふり返ることがあった。(三浦綾子『塩狩峠』)

(11) で、マレニを用いた場合、彼が口を開くことが少なかったことを、話し手が複数回の会議を通して判断していることを表す。一方、タマニを用いると、マレニと同様の解釈ができるほかに、一回の会議の中での発言が少なかったことも表しうる。どちらも個別主体による 反復的運動 であるが、両者を比較するとタマニのほうがより限られた時間・空間における繰り返したと言える。(12) も同様である。

次にマレニに特徴的な用法をあげる。仁田(2002)でも指摘されているが、マレニは「マレニみる + 名詞」という固定した形がある。この形は話し手が当該事態に遭遇する頻度を表す表現である。タマニに換えることはできない。

(13) 稀に (*タマニ) みる 神学的才能に恵まれ、迫害下にも上方地方に潜伏しながら宣教を続けてきた教父の手紙には、いつも不屈の信念が溢れていた。(遠藤周作『沈黙』)

(14) しかし、はじめは、この男を好人物、まれに (*タマニ) 見る 好人物とばかり思い込み、さすが人間恐怖の自分も全く油断をして、東京のよい案内者が出来たくらいに思っていました。(太宰治『人間失格』)

マレニミルの形は、主節の述語として用いられることはほとんどない。また、単に被修飾名詞の存在が少数であることを表すのではなく、程度性を持つ名詞を修飾して、その程度の高さを際立たせる。(13) は「珍しいほどの優れた神学的才能」(14) は「珍しいほどのよい人物」の意味である。例えば、数が少なく珍しい動物であることだけを表す場合には「まれに見る動物」とは表現しないのである。

マレニミル以外の用法を見ても、マレニは一般的な事態、時間的限定性のない事態に用いる例が少なくない。(15) は「砂」の定義をしている文である。ある特定の砂が砂金を含んだり含まなかったりという意味ではなく、砂一般を対象として「砂金を含んでいる場合が少数ある」ことを述べており、砂の 特性 を表している。(16) は名詞述語をとって個別の複数主体の 特性

を述べている。いずれの例もタマニを用いることはできない。

(15)《砂 岩石の碎片の集合体。時として磁鉄鉱、錫石、まれに(*タマニ)砂金等をふくむ。(安部公房『砂の女』)

(16)大学生、高校生、そして中学生らしい男の子の姿もちらほら見える。彼らはいずれも三人の娘のうちの誰かひとり、稀に(*タマニ)はふたりのファンであり、若者らしい一途さで彼女あるいは彼女たちを愛しく思い、好ましく思い、彼女あるいは彼女たちと同時代に生まれたことを誇らしく思い、今日この公演を見にやって来ることができたのを心から嬉しく思っている。(筒井康隆『エディプスの恋人』)

ところで、次の(17)ではタマニへの交換が可能である。

(17)「払いは盆暮まで待つ」とか「水薬代はいらぬ」といったところで、医師にとってはまことに微々たるものである。それも限られた医師がごく稀に(タマニ)行なったに過ぎない。(渡辺淳一『花埋み』)

マレニを用いて「一部の医師が行ったというケースが少数ある」という意味を表しているが、タマニを用いると「特定の限られた医師たちがそれぞれ数回行った」ことになる。この場合に生じる意味の相違は(5')にみられたシバシバとタビタビにおける意味の相違と類似している。

(5')胃のサボタージュのひどい時にはしばしば(タビタビ)脳貧血を起す。

森田(1989)でもマレニは「生起の時間的頻度を問題としているのではなくて、事例の存在の少なさを問題とする」と指摘しているが、マレニはシバシバと同様、一般的なケースの多寡を表す傾向があるといえるだろう。

続いて、タマニの用例を観察する。タマニはマレニと比較すると、個別主体による反復的運動を表す例が多い。²

(18)はじめて信夫が菊を見た日に強く抱きしめられたことはあった。しかし、その後はたまに(??マレニ)肩に手をおかれたことがあるくらいであった。(三浦綾子『塩狩峠』)

(19)大人や子供が彼を指さし、無遠慮に彼を眺め、あけすけに批評をした。蔵王山にとってはそれはどれほど辛いことであつたらう。なにしろ彼は基一郎にひきとられたときから、なんの因果か化け物じみている自分の身長を隠そうとして、人前では滅多に立とうとはしなかったほどなのだから。

彼はそれでもたまに(*マレニ)松原の榆家を訪れた。(北杜夫『榆家の人びと』)

タマニもわずかながら一般主体をとる例がある。次の(20)の主体は「男」であり、これは一般主体である。

2 個別主体をとる実例は、タマニ135例中115例、マレニ72例中29例であった。

(20) 男には、つじつまの合わない、めちゃくちゃなところが、必要なのである。たまに (*マレニ)は無謀なところがないと、精神が萎縮する。(曾野綾子『太郎物語』)
ここでは、男一般を対象として「無謀なところがある男もいれば、ない男もいる」と述べているのではなく、まず個々の男を主体として「たまに無謀なところがないければ、精神が萎縮する」と述べ、その上で、それがどの男にもあてはまるものだ、と一般化しているのである。(20)は男の一般的な特性を表した文であるが(15)が直接砂一般を対象としているのとは一般化の過程が異なる。

述語の品詞を見ると、今回収集した用例の中にはタマニが名詞述語や形容詞述語をとる例は見られなかった。

以上のことから、マレニとタマニの相違点は次のようにまとめられる。

マレニは、反復的運動 を表すこともできるが、より一般的な事態、時間的限定性を持たない特性 を表す例が比較的多い。一方、タマニは主に個別的な主体による具体的な時間に生じた反復的運動 を表す。(特性)を表すことはほとんどない。

3.3 時間的限定性から見たタイプ分け

以上の考察から、頻度を表す副詞は時間的限定性の点から見ると、以下の二つのタイプに大別できる。

主に 反復的運動 を表す。時間、空間は具体的なものにとどまっている：タビタビ、タマニ

反復的運動 から時間的限定性を失い、特性 に至ることもある：シバシバ、マレニ
ただし、その傾向は同じタイプに分類したシバシバとマレニとの間にも差がある。

(21) 加藤はしばしば(*マレニ タマニ)立止って、彼の足元から八ヶ岳の山頂までつづいている雪の高原に眼をやった。(新田次郎『孤高の人』)

(22) 外山三郎は授業中、しばしば(*マレニ タマニ)加藤の方へ眼をやった。(新田次郎『孤高の人』)

いずれも個別主体の反復的運動 である。(21)は登山の途中、(22)は授業中というように反復の時間・空間が限定されているが、シバシバが用いられている。ここで低頻度を表そうとすればマレニは不適当であり、タイプのタマニのほうが適切である。つまり、同じタイプに分類したものの、シバシバとマレニとを比較すると、マレニのほうが時間的限定性の失われた、より恒常的な事態に用いる傾向が強いといえる。

4 話し手による事態のとらえ方

4.1 実現した事態

話し手による事態のとらえ方のうち、ここでは「話し手が当該事態を実現したものとしてとらえているのか」という点を扱うことにしたい。依頼や意志、希望、仮定条件などは発話時までには実現していない事態である。シバシバとタビタビ、タマニとマレニは、この点において、それぞれ異なった現われ方をする。

まず、シバシバとタビタビの用いられ方を比べてみる。(23)～(28)は依頼、希望、条件など、実現していない事態である。これらの例ではいずれもタビタビが用いられており、シバシバへの交換は難しい。

(23) これからは度々(*シバシバ) お伺いいたす積りです。(堀辰雄『ほととぎす』)

(24) できるだけたびたび(*シバシバ) 来てください。私はいつもさびしいのです。

(倉田百三『出家とその弟子』)

(25) ほんともっとたびたび(*シバシバ) 会えたらねえ。(倉田百三『出家とその弟子』)

(26) 「あなたと二人きりでお会いするの、これが始めてね」

「これからはたびたび(*シバシバ) 会ってほしいな」と彼は先手を取返すようなつもりで言った。(石川達三『青春の蹉跎』)

(27) 今まで越して来たような山を沢山越して、河や海をお船で度々(*シバシバ) 渡らなくては往かれないのだよ。(森鷗外『山椒大夫』)

(28) アリーのこの挨拶が又、母を喜ばせた。母は度々(*シバシバ) およびするようにと私によく云った。私はアリーの皮膚が好きだった。それはあのカザリイン先生と同じ系統でありながら、年寄と子供では日本人以上に大へんな違いがあることを知った。(久坂葉子『灰色の記憶』)

これらの例でシバシバを用いることができないのは、シバシバが口語的表現にそぐわないためという要因もあろう。しかし口語的な表現を避けた場合でも「*できるだけシバシバ来てほしいものである」「??これからはシバシバ来る予定である」「*もっとシバシバ会えればよいと思う」「*海や河を船でシバシバ渡らなければそこに行くことは不可能である」のように、やはりシバシバの使用が難しいことに変わりはない。

つまり、タビタビが事態の実現の有無にかかわらず用いることができるのに対して、シバシバは当該事態がすでに現実に生じた場合に用いられる傾向がある。言い換えれば、シバシバを用いた場合には話し手が当該事態を実現した事態としてとらえていることをも表すのである。

次に、タマニとマレニの現れ方を確認する。話し手がすでに事実として確認した事態には、タマニとマレニのいずれも用いられている。

(29) 青雲堂のおじさん小母さんも、もとより桃子を心から歓迎し、それからごくたまに、桃子はここで下田の婆やに会った。(北杜夫『楡家の人びと』)

(30) 妻は笑いました。或は黙っていました。たまにぼろぼろと涙を落す事もありました。(夏目漱石『こころ』)

(31) それを大勢の人が新聞社の速報板でも見るように見入っており、筆記すると慌しく立ち去って行く人が稀にいた。(井伏鱒二『黒い雨』)

(11) 彼は教官会議の席では稀にしか口を開かなかったが、自分の利害に直接関わるような件がもち上がると必ず発言を求めた。(藤原正彦『若き数学者のアメリカ』)

しかし、タマニが実現した事態にも、そうでない事態にも用いられるのに対して、マレニは現実_にに生じたものとして確認されていない事態には非常に用いられにくい。

(32) 遠い所へ来たって何れは帰るんです。そう始終妻子のことを気にもしていませんよ。向うだってたまに (*マレニ) のうのと、鬼のいない間に洗濯をしてみたいでしょう。(森本薫『女の一生』)

(33) 「そうやな。おばはん、たまに (*マレニ) 教会休んだらええがな。(三浦綾子『塩狩峠』)

(34) 近所にいるんだから、たまに (*マレニ) 寄ってくれたらよいのに。(作例)

(35) たまに (*マレニ) 休肝日を作るようにと医者に言われた。(作例)

タマニは話し手が確認したか否かに関わらず用いることができるが、マレニは話し手が実現したものとして当該事態をとらえている場合にのみ用いられる表現であると考えられる。

この章での考察から、頻度を表す副詞は二つのタイプに分けられる。第一のタイプはタビタビとタマニであり、これらは実現した事態であるか否かに関わらず用いられる。一方シバシバとマレニとは発話時に実現していない事態に用いることが難しい。つまり、シバシバとマレニとは、話し手が当該事態を実現したものとしてとらえていることを表す働きを持つことになるのである。

4.2 時間的限定性の有無と「実現した事態」ととらえることとの関連性

ところで、話し手が事態を実現したものとしてとらえているか否かを基準にした分類の結果は、3.3で述べた、時間的限定性から見たタイプ分けと一致している。この一致は偶然あるいは無関係なものではない。なぜなら、具体的な事例が繰り返し生起するところから時間的限定性を失って、主体の恒常的な特性や一般的なケースを述べるためには、話し手が、実現した事態を観察し、観察に基づいて一般化することが必要だからである。

タビタビとタマニは、事態が実現して話し手が事実として確認したか否かには関わらず、反復的運動 の多寡そのものを表すことにその中心的な働きがある。それに対してシバシバとマレ

二とは、実現した事態を話し手が確認し一般化して、一般的なケースの多寡を述べるところに特徴がある。³

5 まとめと今後の課題

以上、頻度を表す副詞は単にその頻度の高低や文体の違いなどで分類するだけではなく、時間的限定性と話し手による事態のとらえ方という二つの点から観察することで、その特徴をより詳しく把握できることを述べてきた。

頻度を表す副詞の中心的な用法は、総じて言うと 反復的運動 がどの程度繰り返されるのかを表すことであろう。しかし、主体が一般主体であったり、述語が動詞のル形や形容詞、名詞述語であったりすることによって 反復的運動 から時間的限定性が失われ、より恒常的な 特性 を表すに至る。その連続した過程の中でどの部分に用法が広がり、あるいは偏っているかが、個々の副詞によって異なるのである。

本稿で扱った副詞の性質をまとめると、次の表のようになる。

時間的限定性	実現の有無	高 頻 度	低 頻 度
反復的運動 を表す。時間的限定性は失われていない	実現したか否かに関わらない	タビタビ	タマニ
反復的運動 を表すが 時間的限定性が失われ、特性 を表すこともある。	実現した事態に用いられる	シバシバ	マレニ

ところで、運動 や 状態 といった一時的な事態は始まりと終わりとがあり、その頻度は事態の生起の頻度である。しかし、恒常的な事態である 特性 は始まりと終わりとがないか、あるいは明らかでないはずである。このような事態について頻度を述べる場合は、事態生起の頻度ではなく、話し手が当該事態に遭遇した頻度である。事態生起は、事態を話し手の外にあるものとしてとらえた、いわば客体的な把握の仕方であるが、話し手が当該事態に遭遇する頻度を述べる場合は、より主体的なとらえ方だと言える。

また、事態生起が線的な時間軸上の分布であるのに対し、話し手が当該事態に遭遇するとは、空間的な広がりを持った範囲に当該事態が存在しているのである。頻度に関わるこの二つの側面について、定延(2008)では、頻度語は本質的には時間的な分布を表すのであって、それが空間

3 話し手が当該事態を実現したものにとらえていることイコール事態の一般化というわけではない。例えばトキオリはシバシバやマレニと同様、実現した事態にのみ用いられる。だが一般主体をとったり主体の特性を表したりする例はほぼ見られず、いわば話し手が観察した結果を個別の事態として描写する表現である。

的な分布を表すのは結果的なものであると述べている。人間が見たり聞いたりしてとらえられる領域（視野）は拡張されることもあり、その視野の中に当該事態が入ってくるという時間的な分布が、結果的にその事態の多寡に結びつく、と説明している。

本稿で取りあげた「時間的限定性」と「話し手による事態のとらえ方」という基準は、時間的な分布から空間的な分布への意味の広がりという問題と、客体的な把握から主体的な把握への変化という問題につながっていると思われる。

今後は、時間的限定性と話し手による事態のとらえ方、この二つの視点から、他の副詞にも対象を広げて考察を進めたい。さらに、頻度の高低という基準とこの二つの視点をからめて頻度を表す副詞の全体像を明らかにしたいと考えている。

（参考文献）

- 久米稔（1968）「頻度をあらかず副詞の意味の測定」『早稲田大学語学教育研究所紀要』7
- 久米稔（1971）「頻度をあらかず副詞の意味の測定（ ） 一対比較法による同意語群の検討」『早稲田大学語学教育研究所紀要』10
- 矢澤真人（1986）「反復の連用修飾成分 「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論」『学習院女子短期大学国語国文論集』第15号
- 矢澤真人（1987）「頻度と連続 連用修飾成分の被修飾単位について」『学習院女子短期大学紀要』25
- 森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店
- 国立国語研究所（1991）『日本語教育指導参考書19副詞の意味と用法』大蔵省印刷局
- 飛田良文・浅田秀子（1994）『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト 現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 田忠魁他編著（1998）『類義語使い分け辞典』研究社
- 喜屋武正勝（2002）「人称の不特定性をめぐって 主語なし文のばあい」『教育国語』4 4 教育科学研究会・国語部会編
- 工藤真由美（2002）「現象と本質 方言の文法と標準語の文法」『日本語文法』2巻2号
- 小池清治・小林賢二・細川英雄・山口佳也 編（2002）『日本語表現・文型事典』朝倉書店
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表増補改訂版』大日本図書
- 定延利行 2008 『煩悩の文法 体験を語りたがる人びとの欲望が日本語の文法システムをゆさぶる話』ちくま新書730 筑摩書房

（用例出典）

- 『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社（1995）
- 筒井康隆「エディプスの恋人」 椎名誠「新橋烏森口青春篇」 サガン「悲しみよ、こんにちは」

安部公房「砂の女」 三島由紀夫「金閣寺」 藤原正彦「若き数学者のアメリカ」 三浦綾子「塩狩峠」
遠藤周作「沈黙」 太宰治「人間失格」 渡辺淳一「花埋み」 北杜夫「楡家の人びと」
曾野綾子「太郎物語」 新田次郎「孤高の人」 石川達三「青春の蹉跎」 森鷗外「山椒大夫」
夏目漱石「こころ」 井伏鱒二「黒い雨」 大江健三郎「他人の足」

青空文庫

坂口安吾「街はふるさと」「牧野さんの死」 小出楢重「楢重雑筆」 久坂葉子「灰色の記憶」
森本薫「女の一生」 芥川龍之介「侏儒の言葉」 堀辰雄「ほととぎす」 倉田百三「出家とその弟子」